

寺田寅彦

怪異考





怪  
異  
考



物理学の学徒としての自分は、日常普通に身边に起こる自然現象に不思議を感じずる事は多いが、古来のいわゆる「怪異」なるものの存在を信ずることはできない。しかし昔からわれわれの祖先が多くの「怪異」に遭遇しそれを「目撃」して来たという人事的現象としての「事実」を否定するものではない。われわれの役目はただそれらの怪異現象の記録を現代科学上の語彙を借りて翻訳するだけの事ではなければならない。この仕事はしかしはなは

だ困難なものである。錯覚や誇張さらに転訛てんかのレンズによつてはなはだしくゆがめられた影像からその本体を言い当てなければならぬ。それを的確に成效しうるためにはそのレンズに関する方則を正確に知らなければならぬ、のみならず、またその個々の場合における決定条件として多様の因子を逐一に明らかにしなければならぬ。この前者の方則については心理学のほうから若干の根拠は供給されるとしても、後者に関する資料はほとんどすべての場合において永久に失われている。従つてほんとうに科学的な推定を下すということはほとんど望

み難いことである。ただできうる唯一の方法としては、有るだけの材料から、科学的に合理的な一つの「可能性」を指摘するに過ぎない。もつともこの可能性が非常に多様であれば、その中の二三を指摘してみても、それは結局なんらの価値もない漫談となってしまうであろうが、多くの場合に必ずしもそうとは限らない。ことにある一種の怪異に関する記録が豊富にあればあるほど、この可能性の範囲はかなりまで押しせばめられる。従ってやや「もつともらしい仮説」というまでには漕ぎつけられる見込みがあるのである。そこまで行けば、それはともか

くも一つの仮説として存在する価値を認めなければならず、また実際科学者たちにある暗示を提供するだけの効果をもつ事も有りうるであろうと思われる。

そういう意味で自分が従来多少興味をもっている怪異が若干ある。しかしこれを正当に研究するためにまず少なくとも一通りは関係文献を古書の中から拾い集めてかかる必要がある。それは到底今の自分には急にできそうもない。それかと言っていていつになったらそれができるといふ確かな見込みも立たない。

それで、ただここにはほんの一つの空想、ただし多少科



学的の考察に基づいた空想あるいは「小説」を備忘録として書き留めておく。もしこれらの問題に興味をもつほんとうの考証家があればありがたいと思うまでである。

## 一

その怪異の第一は、自分の郷里高知付近で知られている「孕はらみのジャン」と称するものである。孕は地名で、高知の海岸に並行する山脈が浦戸湾に中断されたその両側の突端の地とその海峡とを込めた名前である。この現

象については、最近に、土佐郷土史の權威として知られた杜山居士とざんこじ寺石正路氏てらいしまさみちが雑誌「土佐史壇」第十七号に「郷土史断片」その三〇として記載されたものがある。「(前略)昔はだいぶ評判の事であつたが、このごろは全くその沙汰がない、根拠の無き話かと思えば、「土佐今昔物語」という書に、沼澄ぬまざみ(鹿持雅澄翁かもちまさざみおう)の名をもつて左のとおりしるされている。

孕の海にジヤンと唱うる稀有けうのものありけり、たれし人もいまだその形を見たるものなく、その物は夜半にジャーンと鳴り響きて海上を過ぎ行くなりけり、漁

業をして世を渡るどちに、夜半に小舟浮かべて、あるは釣りをたれ、あるいは網を打ちて幸多さちかるも、このも海上を行き過ぐればたちまちに魚騒ぎ走りて、時を移すともその夜はまた幸さちなかりけり、高知ほとりの方言に、ものの破談になりたる事をジャンになりたりといふも、この海上行き過ぐるものよりいでたることなん語り伝えたりとや。

この文は鹿持翁の筆なればおおよそ小百年前のことにして孕はらみのジャンはこのほどの昔よりもすでにその伝があつたことが知れる（後略）。」寺石氏はこのジャンの

意味の転用に関する上記の説の誤謬ごびゆうを指摘している。また終わりに諏訪湖の神渡りの音響の事を引き、孕のジャンは「何か微妙な地の震動に関したことではあるまいか」と述べておられる。

私は幼時近所の老人からたびたびこれと同様な話を聞かされた。そしてもし記憶の誤りでなければ、このジャンの音響とともに「水面にさざ波が立つ」という事が上記の記載に付加されていた。

この話を導き出しそうな音の原因に関する自分のはじめの考えは、もしや昆虫かあるいは鳥類の群れが飛び立

つ音ではないかと思つてみたが、しかしそれは夜半の事だというし、また魚が釣れなくなるという事が確實とすれば単に空中の音波のためとは考えにくいと思われた。ところが先年筑波山つくばさんの北側の柿岡かきおかの盆地へ行つた時にかの地には珍しくない「地鳴り」の現象を数回体験した。その時に自分は全く神来的に「孕はらみ」のジャンはこれだ」と感じた。この地鳴りの音は考え方によつてはやはりジャンヤーンとも形容されうる種類の雑音であるし、またその地盤の性質、地表の形状や被覆物の種類によつてはいつそうジャンと聞こえやすくなるであらうと思われうる

たちのものである。そして明らかに一方から一方へ「過ぎ行く」音で、それが空中ともなく地中ともなく過ぎ去って行くのは実際他に比較するものない奇異の感じを起こさせるものである。ちようど自分が観測室内にいた時に起こった地鳴りの際には、磁力計の頂上に付いている管が共鳴してその頭が少なくとも数ミリほど振動するのを明らかに認める事ができたし、また山中で聞いた時は立っている靴の底に明らかにきわめて短週期の震動を感じた。これだけの振動があれば、適当な境界条件の下に水面のさざ波を起こしうるはずであるし、また水中の魚

類の耳石等にもこれを感じなければならぬわけである。もつとも、魚類がこの種の短週期弾性波に対してどう反応するかについて自分はあまりよく知らないが、これだけの振動に全然無感覚であろうとは想像し難い。

地鳴りの現象については、わが国でもすでに大森博士らによっていろいろ研究された文献がある。そのほんとうの原因的機巧はまだよくわからないが、要するに物理的には全くただ小規模の地震であつて、それが小局部にかつ多くは地殻表層に近く起こるといふに過ぎないであろうと判断される。

もし「孕はらみのジャン」として知られた記録どおりの現象が、実際にあつたものと仮定し、またこれが筑波地方の地鳴りと同一系統の地球物理学的現象であると仮定すると、それから多少興味のある地震学上のスペキュレーションを組み立てる事ができる。

ジャンの記録はすでに百年前にはある。もつともこの記録では、当時これが現存したものか、あるいは過去の事として書いたものか、あまり判然とはしない。そしてとにかくわれわれの現時はないと言われている。自分の幼時にこの事を話した老人は現に自分でこれを体験した



かのごとく話したが、それは疑わしいとしても、この老人の頭の若かった時代にこの話がかなりの生々しい色彩をもつて流布されていた事は確からしい。

土佐における大地変の最初の記録としては、西暦六八四年天武天皇の時代の地震で、土地五十万頃けいが陥落して海となったという記録があり、それからずっと後には慶長九年（一六〇四）と宝永四年（一七〇七）ならびに安政元年（一八五四）とこの三回の大地震が知られており、このうちで、後の二回には、海浜の地帯に隆起や沈降のあった事が知られている。さて、これらの大地震によつ

て表明される地殻の歪ひずみは、地震のない時でも、常にどこかに、なんらかの程度に存在しているのであるから、もし適当な条件の具備した局部の地殻があればそこに対し小規模の地震、すなわち地鳴りの現象を誘起しても不思議はないわけである。そして、それがあつた時代には頻繁に現われ、他の時代にはほとんど現われなくなつたとしても、それほど不思議な事とは思われぬ。

今問題の孕はらみの地形を見ると、この海峡は、五万分の一の地形図を見れば、何人も疑う余地のないほど明瞭な地殻の割れ目である。すなわち東西に走る連山が南北に

走る断層線で中断されたものである。さらにまたこの海峡の西側に比べると東側の山脈の脊梁せきりょうは明らかに百メートルほどを沈下し、その上に、南のほうに数百メートルもずれ動いたものである事がわかる。もつともこの断層の生成、これに伴なう沈下や滑動かつどうの起こった時代は、おそらく非常に古い地質時代に属するもので、その時の歪ひずみが現在まで残っているとは信ぜられない。しかしそのような著しい地殻の古きずが現在の歪ひずみに対して時々過敏になりうるであろうと想像するのは単に無稽むけいな空想とは言われぬであろう。

それで問題の怪異の一つの可能な説明としては、これは、ある時代、おそらくは宝永地震後、安政地震のころへかけて、この地方の地殻に特殊な歪を生じたために、表層岩石の内部に小規模の地すべりを起こし、従って地鳴りの現象を生じていたのが、近年に至ってその歪が調整されてもはや変動を起こさなくなつたのではないかという事である。

この作業仮説の正否を吟味しうるためには、われわれは後日を待つほかはない。もし他日この同じ地方に再び頻繁に地鳴りを生ずるような事が起これば、その時には

じめてこの想像が確かめられる事になる。しかしそれまでにどれほどの歳月がたつてであろうかという事については全く見当がつかない。ただ漠然と、上記三つの大地震の年代差から考えて、今後数十年ないし百年の間に起こりはしないかと考えられる強震が実際起こるとすれば、その前後に何事かありはしないかという暗示を次の代の人々に残すだけの事である。しかも現代の読者のうちでこれと類似の怪異伝説あるいは地鳴りの現象についてなんらかの資料を教えてくれる人でもあれば望外の幸いである。

## 二

次に問題にしたいと思う怪異は「頽馬」<sup>たいば</sup>「提馬風」<sup>たいばふう</sup>また濃尾地方<sup>のうび</sup>で「ギバ」と称するもので、これは馬を襲つてそれを斃死<sup>へいし</sup>させる魔物だそうである。これに関する自分の知識はただ、磯清氏<sup>いそきよ</sup>著「民俗怪異篇」によつて得ただけであつて、特に自分で調べたわけではないが、近ごろ偶然この書物の記事を読んだ時に、考えついた一つの仮説がある。それは、この怪異はセントエルモの火、あ

るいはこれに類似の空中放電現象と連関したものでないかという事である。

右の磯氏の記述によるとこのギバの現象には二説ある。その一つによると旋風のようなものが襲来して、その際に「馬のたてがみが一筋一筋に立って、そのたてがみの中に細い糸のようなあかい光がさし込む」と馬はまもなく死ぬ、そのとき、もし「すぐと刀を抜いて馬の行く手を切り払う」と、その風がそれで行って馬を襲わないというのである。もう一つの説によると、「玉虫色の小さな馬に乗って、しやうじやうひ猩々緋しやうじやうひのようなものの着物を着て、

金の瓔珞ようらくをいただいた」女が空中から襲って来て「妖女ようじよはその馬の前足をあげて被害の馬の口に当ててあと足を耳からたてがみにかけて踏みつける、つまり馬面にひしと組みつくのである」。この現象は短時間で消え馬はたおれるというのである。この二説は磯氏も注意されたように相互に類似している。これを科学的な目で見ると要するに馬の頭部の近辺に或る異常な光の現象が起こるといふふうふうに解釈される。

次に注意すべきは、この怪異の起こる時の時間的分布である。すなわち「濃州のうしゅうでは四月から七月まで、別



して五六月が多いという。七月になりかかると、秋風が立ち初める、とギバの難は影を隠してしまう。武州常州ぶしゅうじょうしゅうあたりでもやはり四月から七月と言っている」。また晴天には現われず「晴れては曇り曇っては晴れる、村雲などが出たりはいたりする日に限って」現われるとある。また一日じゅうの時刻については「朝五つ時前（午前八時）、夕七つ時過ぎ（午後四時）にはかけられない、多くは日盛りであるという」とある。

またこの出現するのにおのずから場所が定まっている傾向があり、たとえば一里塚のような所の例があげられ

ている。

もう一つ参考になるのは、馬をギバの難から救う方法として、これが襲いかかった時に、半纏はんてんでも風呂敷でもむしろ莖むしろでも、そういうものを馬の首からかぶせるといいということがある。もちろん、その上に、尾の上の背骨に針を打ち込んだりするそうであるが、このようにものをかぶせる事が「針よりも大切なまじない」だと考えられている。またこれと共通な点のあるのは、平生のギバよけのまじないとして、馬に腹当てをさせるとよい、ただしそれは「大津東町上下仕合」と白く染めぬいたものを

用いる。「このアブヨケをした馬がギバにかけられてたおれたのを見た事がないと、言われている」。

別の説として美濃では「ギバは白虻しろあぶのような、目にも見えない虫だという説がある、また常陸ひたちではその虫を大津虫と呼んでいる。虫は玉虫色をしていて足長蜂あしながばちに似ている」という記事もある。

以上の現象の記述には、なんらか事実に基づいたものがあるという前提を置いて、さて何かこれに類似した自然現象はないかと考えてみると、まず第一に旋風が考えられる。もし旋風のためとすればそれは馬が急激な気圧

降下のために窒息でもするか内臓の障害でも起こすのであろうかと推測される。しかしそれだけであってこのギバの他の属性に関する記述とはなんら著しい照応を見ない。もつとも旋風は多くの場合に雷雨現象と連関して起こるから、その点で後に述べる時間分布の関係から言つて多少この説に有利な点はある。しかしいわゆる光の現象やまた前述のまじないの意味は全くこれでは説明されない。

これに反して、ギバがなんらかの空中放電によるものと考え、たてがみが立ち上がったり、光の線条が見

えたり、玉虫色の光が馬の首を包んだりする事が、全部生きた科学的記述としての意味をもつて来る。また衣服その他で頭をおおい、また腹部を保護するという事は、つまり電気の半導体で馬の身体の一部を被覆して、放電による電流が直接にその局部の肉体に流れるのを防ぐという意味に解釈されて来るのである。

またこういう放電現象が夏期に多い事、および日中に多い事は周知の事実であるので、前述の時間分布は、これときわめてよく符合する事になる。

場所のおのずから定まる傾向については、自分は何事

も具体的のことをいうだけの材料を持ち合わせないが、これも調べてみたら、おそらく放電現象の多い場所と符合するようなことがありはしないかと想像される。

しかしこの仮説にとって重大な試金石となるものは、馬のこの種の放電に対する反応いかんである。すなわち人間にはなんらの害を及ぼさない程度の放電によって馬が斃死<sup>へいし</sup>しうるかどうかという事である。これについてはおそらくすでに文献もある事と思われるが、自分はまだよく承知していない。ただ馬が特に感電に対して弱いものであるという事だけは馬に関する専門家に聞いて確か

める事ができた。なおこれについては高压電源を用いていくらかも実験する事が可能であり、またすでにいくらかは実験された事かもしれない。しかし実験室で、ある指定された条件のもとにおいて行なわれた実験が必ずしも直接に野外の現象に適用されるかどうかは疑わしい。結局は実際の野外における現象の正確な観察を待つ必要がある。

ギバの現象が現時においてもどこかの地方で存在を認められているか。もしいるとすればこれに遭遇したという人の記述をできるだけ多く収集したいものである。読

者の中でもしなんらかの資料を供給されるならば大幸である。

（この「怪異考」は機会があれば、あとを続けたいという希望をもっている。昭和二年十月四日）

（昭和二年十一月、思想）







日本文学電子図書館

---

## 怪異考

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第二卷  
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第59刷発行

---



日本文学電子図書館